

死刑廃止国際条約の批准を求める

FORUM90

地球が決めた死刑廃止

VOL.127

頒価 300 円

2013 年 1 月 25 日発行
フォーラム 90 実行委員会
〒 107-0052 東京都港区赤坂 2-14-13
港合同法律事務所気付
TEL: 03-3585-2331
FAX: 03-3585-2330
振替口座: 郵便振替 00180-1-80456
加入者名: フォーラム 90

主要目次

「罪と罰と赦しと」開催に当たって 太田昌国 1 頁
「死刑を止めた国・韓国」出版記念集会報告 3 頁

原発を考え、死刑を考える

神田香織、山本太郎、白石草、安田好弘 4 頁
インフォメーション/ブックレビュー 16 頁

第 2 回死刑映画週間 「罪と罰と赦しと」開催に当たって

昨年開催した死刑映画週間「『死刑の映画』は「命の映画」だ」から、私たちは確かな手応えを感じた。一見したところ「暗さ」と「重さ」を感じさせる催し物だが、にもかかわらず大勢の人びとが詰めかけてくれたから、ということも理由の一つだ。映画を観たり、ゲ

ストの話を聞いたりした人から、死刑制度についての自分の誤解や無知をめぐって、また犯された罪と死刑囚をめぐる思い込みをめぐって、冷静にふり返る声をいくつも聞いた、ということもある。その後、私たちが開く集会や会議に新たに参加している若い世代の人びとは、この映画週間を通して出会った、というのも大きな理由だ。もとより、私たちとは逆に、死刑制度は維持されなければならないと考えている人びとも、この催し物に参加していたに違いない。それも、私たちが望んだことだ。情報公開が極



©日活

端に制限され、秘められている部分がありにも大きい社会制度については、賛否いずれの立場に立つ誰であっても、まず、その制度のことを「もっと知る」ことが必要だと思うからだ。

制度のことは、法律や歴史の中でそれが果たしてきた役割を通して、外形的には理解が届く。分

からないのは、この制度の下に生きざるを得ないひとの心だ。あるいは、この制度を何らかの理由で廃止した社会に生きるひとの心に、どんな変化が起こるのか、ということだ。その意味では、開催した私たち自身が、10 本の作品をあらためて（あるいは初めて）観て、それぞれ深く思うところがあった。生きた時代も場所も異なる多くの人びと——フィクションとドキュメンタリーでは、犯罪が想像上のものか実際に起こったものかの違いはあるが、いずれも、罪を犯した者あるいは冤罪者・被害者・遺族・

谷垣禎一新法相に死刑執行せぬよう要請する

谷垣新法相は 12 月 27 日未明の就任会見で、死刑制度について「基本的に必要だと思っている。被害者感情、国民感情からみて現在も十分に理由があるものと考えている」「死刑判決を下した裁判所の判断を前提として、法相として最終的に判断

していく」と執行に前向きの姿勢を示した。

フォーラムとしてはまず本誌同封の要請ハガキの発送を、読者のみなさんに呼びかけたい。また法相の選挙区の人々と連携して何らかの行動をとっていくつもりだ。

周辺の人びと、そして脚本家・監督・俳優など映画に関わるすべての人びと——が、「死刑」という、人類が生み出した制度をめぐる、肯定しあるいは否定し、怒り、悲しみ、あれこれ戸惑い、迷い、断言し、苦悩する姿が、そこにはあった。この重層的な複数の思いを、ひとつの固定的な線の上を手際よく整理することはできない。そうしようと焦るのではなく、そこで揺らぐひとの（自分の）心のありようを、じっくりと見つめることが必要だ、と私たちは考える。

今回選んだ9作品から、大まかに言って「罪と罰と赦し」という共通のテーマを私たちは取り出した。そこから微妙に外れ、別な課題を取り出すべき

作品もある。いずれにせよ、ひとを殺めた「罪」を犯した者がいて、それに対する「罰」として国家あるいは或る権力の下で処刑する行為が行なわれるという、明快な因果の関係だけで、事が済むわけではない。済ませてはならない。罪ある者の「償い」と、長い苦悩を経たうえでの当事者の「赦し」の可能性を排除することなく、制度としての死刑の問題を捉えたい、それはひとが持つ人間観と価値観に関することだ、と私たちは主張したいのである。

太田昌国（死刑廃止国際条約の批准を求めるフォーラム 90・映画週間実行グループ）

最終日のトークには山本太郎さんも登場

諸般の事情でチラシには間に合わなかったのですが、2月8日の最終回「死刑弁護人」上映後、この映画のナレーションを担当し、16日から同じユースペースで公開される「約束」（東海テレビ）で若き日の奥西勝さんを演じられた山本太郎さんがトークに参加されます。監督の斉藤潤一さん、そして安田好弘弁護士との鼎談、お見逃しなきように。

上映作品とタイムテーブル

- A 死刑台のエレベーター
- B 少年死刑囚
- C ハーモニー
- D 第一の敵
- E 略称・連続射殺魔
- F ヘヴンズストーリー
- G 真昼の暗黒
- H 死刑弁護人
- I 再生の朝に

トーク

- 2日 ヤンヨンヒ（映画監督）
- 3日 瀬々敬久（映画監督）
- 4日 丸川哲史（明治大学教員）
- 5日 川村湊（文芸評論家）
- 6日 足立正生（映画監督）
- 7日 桜井昌司（布川事件国賠訴訟原告）
- 8日 山本太郎（俳優）
齊藤潤一（TVディレクター）
安田好弘（弁護士）

◆各回入れ替え制

*一部の作品の画・音に不備がある場合もありますので、ご了承ください。
*やむをえない事情により作品および上映時間が変更される場合がございます。

2日(土)	3日(日)	4日(月)	5日(火)	6日(水)	7日(木)	8日(金)
A 11:00	E 11:00	A 11:00	H 11:00	I 11:00	C 11:00	B 11:00
B 13:30	F 13:00	G 13:30	I 13:30	D 13:30	A 13:30	C 13:30
C 16:00		H 16:00	C 16:00	A 16:00	I 16:00	E 16:00
18:00 トーク		I 18:30	B 18:30	E 19:00	G 18:30	H 18:30
ヤン ヨンヒ 瀬々敬久		20:20 トーク				
D 19:00	G 19:00	丸川哲史	川村湊	足立正生	桜井昌司	齊藤潤一 安田好弘

入場料金

一般 1,500円 / 大学・専門学校生 1,300円 /
シニア 1,100円 / 会員 1,100円 / 高校生 800円
前売券 5回券 4,500円 / 3回券 2,800円 /
1回券 1,000円
『ヘヴンズストーリー』のみ 2,000円。
5回券、3回券の2回分で見ることが出来ます。

ユースペース

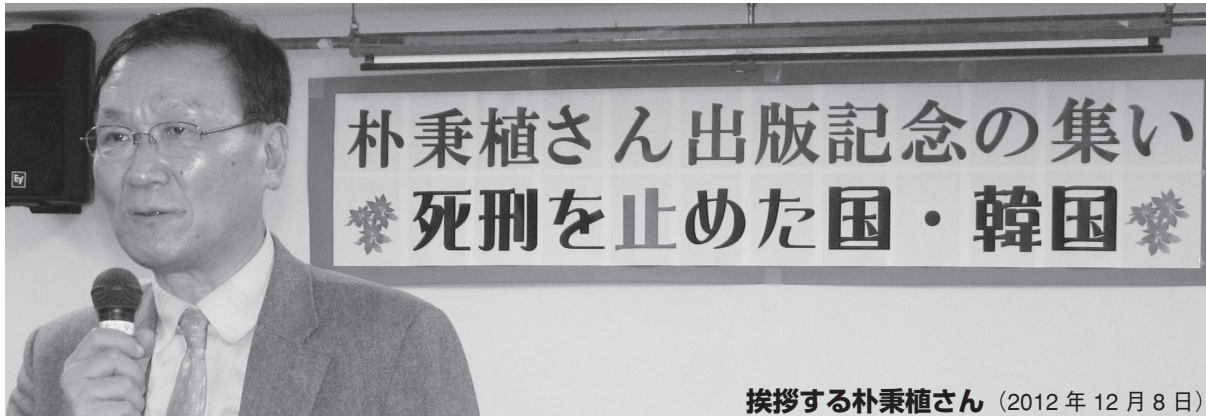
渋谷区円山町 1-5（渋谷・文化村前交差点左折）
TEL. 03-3461-0211
<http://www.eurospace.co.jp/>

ゲスト紹介

ヤン ヨンヒ=映画監督 / 瀬々敬久=映画監督
丸川哲史=明治大学教員 / 川村湊=文芸評論家
足立正生=映画監督 / 桜井昌司=布川事件国賠訴訟原告
齊藤潤一=TVディレクター / 安田好弘=弁護士

協力：足立正生 / アルシネテラン / ザジ・フィルムズ
/ シネマテーク・インディアス / 東風 / 日活
株式会社 / 北星株式会社 / ムヴィオラ / C J
Entertainment Japan
東京国立近代美術館フィルムセンター





挨拶する朴秉植さん (2012年12月8日)

12月8日、文京区民センターで朴秉植東国大学教授の『死刑を止めた国・韓国』の出版を記念して集会和パーティーを行った(フォーラム90、インパクト出版会共催)。

まず安田好弘弁護士が朴さんとの27年におよぶ交流と自分の見た韓国の運動について話され、最後に次のように締めくくった。

「韓国も私たちと同じ困難に立ち向かいながら、しかし上手にそれを克服してここまでやって来られたというその面白さに、最後までさっと読んでしまうという本です。ぜひ、これを読んでいただきたい。海を越えたすぐ隣に、これを実現している人たちがいて、そして国がある。人権という事でつながった人間関係というのは、仮に国境問題があったところでびくともしない。人権は国境を超えるし、国家の利害あるいは煽動的な思想を越えてしっかりと結びつく、びくともしない人間関係を作り上げてくれると思っています。」

続いて、一緒に韓国から駆けつけてくれた被害者遺族の高貞元さんは、来年10月9日で自分の3人の家族が殺害されて10年になる、これを機に経済的に苦しんでいる殺人被害者家族の子供たちに奨学金を支給する基金を作りたい、と話された。もう一つは凶悪な犯罪者に対する教化活動として、ソウル南部刑務所長の要請で4人の殺人犯と3泊4日の修復のための旅路というプログラムを一緒にやった。最後の日には、私にこれからお父さんと呼びたいと言ってくれた。彼らは一瞬の過ちで殺人を犯し、刑務所で一生取り返しのつかない青春を送ってしま



高貞元さん(左)

う。加害者たちが過ちを改めるように私が助けながら多くの事を学んだ。このような活動をずっと続けて行くつもりですと、語られた。

続いて朴さんがプロジェクターを使って「死刑を止めた国・韓国」について約1時間話された。この12月で韓国が最後の死刑執行を行ってからちょうど15年になる。この本に沿いながら、大統領選をも射程にいれながら講演していただいた。

後半は、高田章子さんの司会で菊田幸一明治大学名誉教授の乾杯の音頭からパーティーとなる。

執行しなかった自民党の元法務大臣、杉浦正健弁護士は、日本弁護士連合会に

歴史上始めて以来死刑廃止検討委員会ができ、乞われて顧問になった。加毛修委員長、小川原優之事務局長が中心で全員集まると100人ぐらいの大きな委員会で、いろんな方がいるが、みんな熱心だ。死刑の問題をまず弁護士会で議論をして国民的議論をするたき台を作らねばならないのではないかといいことでやっていたと挨拶された。続いて加毛委員長が、日弁連の調査団が訪韓したときの朴さんの対応に感謝の意を表され、小川原事務局長は、死刑廃止フォーラムとできるかぎり一緒にやっていきたいと自分は思っている、韓国の調査のときに太平歌という「細かい事はいいじゃないか皆で楽しくやろう」という歌があったが、皆で楽しく死刑廃止を実現していきたいと挨拶された。

このほか様々な方が挨拶され、2次会にもほとんどの人が残り盛会だった。この日の第1部の動画は死刑廃止チャンネルで見ることができる。

朴さんは10日京都弁護士会、11日午前龍谷大学、夜東京に戻って弁護士会と、精力的に講演活動をこなして12日に帰国された。

『死刑を止めた国・韓国』がより多くの人に読まれ、韓国での実践的な活動からさまざまなことを学び取って頂けたらと思う(定価1400円+税)。(深田卓)



原発を考え、死刑を考える

神田香織 (講師)、山本太郎 (俳優)、白石草 (OurPlanet-TV) 司会進行: 安田好弘 (弁護士)

ここに掲載するのは2012年10月6日、四谷区民ホールでフォーラム90主催で行った「響かせ合おう死刑廃止の声 2012」でのシンポジウムである。

1、原発と死刑

安田 今日、お忙しいところをありがとうございます。

私どもは、「反原発、反死刑」、「原発と死刑を考える」ということで、このシンポジウムを企画しました。大変語呂としてはマッチしているんですが、「原発と死刑」、「反原発と反死刑」、ハタと考えると大変難しい問題を孕んでいるのかなと思います。

今日は反原発運動を中心に担っていらっしゃる方々、そして同時に、反原発と反死刑とを一緒にやっていたらっしゃる神田さん、この3名の方をお迎えしました。

私はいろんな運動を見てきました。いま日本のなかで最大の運動といえば、反原発運動だろうと思うんです。規模の大きさだけではなく、私がいままで出会ったことのない運動だろうと思います。主体を担っているのはすべて市民の人たち。地域を超え、そして年齢を超えて運動が広がっているわけです。しかも既存の運動のように政党、あるいは政治集団に指導されている運動ではない。独自のコミュニケーション媒体、インターネットあるいはメールなどで意志が広がっていく。しかも“非暴力”、“直接行動主義”に徹している。この運動から、私たちはいろんな問題提起を受け、あるいは学び、そして共通の問題を意識し、あるいは自覚していきたい

と思っています。

まず最初に、みなさん方が原発と死刑について、どういうお考えを持っていらっしゃるのか、率直なところをお聞かせしていただいて、議論のスタートにしたいと思います。まず、神田さんからお願いしましょうか。

神田 みなさん、こんにちは。講師の神田香織です。よろしく願いいたします。(拍手)

ご存じのかたも多くいらっしゃると思いますが、「はだしのゲン」という漫画を講談にして、私の講談師人生がスタートいたしました。26年前のことです。それから原爆のことを語っていくなかで、常にやられた側、理不尽な目にあっている大変な人たちの立場に自分の身を置いてやってきました。ちょうど26年前といえばチェルノブイリの事故があった年です。10年ほど前からチェルノブイリの講談を語っております。

そして安田さんのとりもつご縁で、林眞須美さんの講談も語っております。林眞須美さんって私はホースで水をかけているシーンしか見ておりませんでしたので怖い人だと思っていたのですが、安田さんに「けっこうチャーミングな人だよ」と言われてびっくりしまして、4、5年前ですが大阪拘置所に会いに行きました。彼女は私に向かって、まず最初に、「保険金詐欺をしておめんなさい」と、謝りました。私に謝らなくても別にいいんですけども。「でも、私はヒ素は入れてない。絶対にやってない」と強くおっしゃいました。本当にチャーミングな人で。やはりこういう……、なんて言うんですかねえ、イメージがあまり良くない、「あんな人だったら死刑にしてもいいんじゃないか」みたいなことで彼女の死刑が決まっていってしまったような気がしますので、やはりこれはとんでもないなど。

死刑を考える時に、原発で私のふるさとの福島県が大変な目にあっているんですが、ふるさとを失い、そして人間関係もズタズタにされ、子どもたちが将来どんな目にあうかわからないというなかで暮らしている人たちと、冤罪で刑務所に入っていたらっしゃる方、重なってくる部分があります。ですから、今日の原発廃止と死刑廃止は、



林眞須美さんを通じて、私の中にあるんですね。福島報道はだんだん少なくなっています。白石さんに本当に頑張って放送していただいておりますが、どんどんニュースが少なくなっていく。でも福島の現実というのは、私はいろんな場所を通じて語っていきたくて思っております、芸人ではありますけれどもNPOの「ふくしま支援・人と文化ネットワーク」を立ち上げて、折あるごとに地元の福島とこちらとの交流の場を持っております。それと同時に、今日販売しておりますメッセージTシャツなども通じまして、繋がっていきたくて頑張っております。

原発もこんなことになっているんだから、大飯原発も再稼働しなくて夏を乗りきれたわけですからね。それが明らかになったのに、なぜ大飯原発をまだ止めないんだというところですごく頭に來ますし、大間原発の建設も始まるというし。私たちのこういう声は、じゃあ誰が、少数の一体どのへんの人が握りつぶしているのだらうと思うと、悔しさと絶望感が感じられるわけなんです。そんな時に、今日のこうした集まりを契機にして、これからめげないでやっていくにはどうしたらいいかということを考えていければと思っております。よろしく願いいたします。(拍手)

安田 ありがとうございます。神田さんは、「はだしのゲン」で反原発を語り、そして「チェルノブイリの祈り」で反原発を掲げられた。そして実は、講演の演目に林眞須美さんの……、

神田 「シルエットロマンスを聞きながら」というタイトルで講演いたしました。今日販売しております『乱世を生き抜く語り口を持って』（インパクト出版会）の中にもそのあたり書いてありますので、よろしく願いいたします。

安田 「反原発」、「反原発」、「反死刑」という一つの筋の上に活動していらっしゃるというわけです。次は、太郎さんに、今日のこういう登場の仕方も含めて、話をしていただきたいと思うんですけども(笑)。

山本 どうも、怪我人です(笑)。肉離れを起こしたんですね。それで、動かないほうが早く治るということで、ずっと車椅子に乗っています。

まさか、自分が死刑廃止のイベントに出る、なんてことは2年前には考えられなかったことです。去年の3・11があるまで、僕は社会的な問題に関して口を出したり、深く考えたりすることはなかったんです。でも3・11があって原発の事故があって、自分の命と直結する問題に立たされて、やっと「いまこの世の中はどうなっているのか」ということに対して興味を持ったという、本当に情けない話なんですけれども。去年36歳になって、やっと目が開いた状況ですね。

この原発という問題と死刑という問題、共通点は、やっぱりこれは弱い人に対するいじめです。3・11がある前までは、この死刑というものに対して、人の命を奪ってしまったんだしたら、それは死をもって償うしかないだろうと、ずっと思っていたんです。

でも3・11というものを通して世の中を見たときに、いろんなことを知っていくと、この死刑問題の裏には、たくさん冤罪がある、いわれなき罪を被せられて、おまけに命まで奪われてしまう可能性もあると知った時に、すごく難しい問題だと。その前までは、「死刑はやるべきだ」と。そこからもうひと段階、自分の気持ちが動いたときに、じゃあ国家が代わりに敵討ちするんじゃないかと、その被害者である家族なりが直接敵討ちする制度だったらいいんじゃないかと思ったんです。だったら刃物を渡され、死刑囚を好きにしてくださいという状況になったときに、全ての人が本当に命を奪えるかと思ったら、そうじゃないですね。そこで思いとどまる被害者の家族の方もいらっしやるんじゃないか。そこにさらに、冤罪という問題が入ってきたときに、やっぱりそれは違うな、国家が人の命をコントロールするというようなものがあるってはいけないということに心が動いてきている。死刑も廃止すべきだという気持ちが、自分の中で生まれてきてるんです。

でも原発事故が起き、東日本一帯が広く汚染されました。もちろん均一の汚染ではなくホットスポットが点在している。放射線管理区域といわれるように、厳格に管理されていた区域にも子どもたちを「安全だ」といって住まわせているような、狂った状況です。はっきり言って、これは子殺しです。切り捨てです。そういう政策を決めた政治家、官僚、この事故を引き起こした東電の関係者。「わたしにも老後がありますから」と言って退職金5億円を普通におさめてしまうような人たち。この人たちを死刑にできるとしたら、はっきり言って死刑にしてほしいんですね(笑)。ええ、ホントに。これだけの事故を起こしておきながら、「段階的に原発やめましますよ」と言いながら、もう何十年にもわたって原発を続けようとしている。30%ぐらいしかできていない大間原発を、これからフルMOXで作るという決定をする人たちは本当にもう死んでほしいなって、正直思っちゃうんです。

東海テレビが制作した「死刑弁護人」というドキュメンタリーがあるんです。その主役が安田弁護士なんです。その作品に、安田さんのたくさんの心を打つコメントがある。要は、人は変わっていくものなんだと。例えば被害者がいて、被害家族がいて。犯人とされる人、死刑囚とされる人が命をもって償ったとしたら、そのもの自体はそこで収まるのかもしれないけど、「どうしてその事件が起こったのか」とか、その社会的な背景だとか、これからそういう問題が起きる時の原因を究明するというか、その部分にフォーカスしていかなくちゃいけないんだということに気づいたんですね。

そういうことを知った時に、じゃあ自分はどうなんだらう。今回の原発事故において、民衆をバカにしたような政策を次々にあげて、子殺し政策みたいなものを普通に推進している人々に対しても、死刑というかたちではなくて、次につながるもの、究極の状況に置かれたときに、責任ある立場の

人が、命を優先させるんじゃないで、自分の地位を守ろうとする、その心理状態だったり、そういう状況というものを、もっとたくさんの方が知っていく。そして次の核事故が起こった時に、そういう心理的に作用するような部分を、しっかりとカバーしていきけるような法律だったり、そういう決まり事みたいなものを作っていくためには、今回の事故を教訓として次に生かすためには、やっぱり死刑にしちゃダメなんですよ。その人たちには生きて償っていたで、「どうして自分はその時そういう気持ちになったのか」ということを、どんどん詰めていかなきゃいけないんだということに気づいたんです。いろんなふうにも悩んだんですけど、やっぱり死刑というのはないほうがいいなあ、というのが今の僕の中の結論です。(拍手)

安田 今おっしゃった、いざという時に自分の立場とか利益とかそういうものを優先するのではなくて、命を優先するという一つの考え方が、今の東電の人たちに染み透っていくということで初めて、再び同じような事故を起こさなくなっていくだろう。そういう人たちが増えることによって、あの人たちは償いができるんだということなんですよ。

次に、白石さんにお話をうかがおうと思います。反原発運動の現状も含めてご紹介していただきながら、問題提起にかわるお話をさせていただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

白石 みなさん、こんにちは。「OurPlanet-TV」の白石と申します。

私自身は原発も死刑も、なんとなく小さい頃から反対なんですよ。私は映像の仕事をしていますけれども、中学の時には宮崎駿とチャップリンが私の中の二大巨匠というふうに思っていました。チャップリンの作った「殺人狂時代」を見た時に、自分がずっと違和感を持っていたものがカチッと嵌まったような思いがしました。身体にハンディキャップがある貧しい妻を支えるために、結婚詐欺をして次々に殺人をしてしまう男が主人公です。その主人公が、ある少女に出会って、心を入れ替えるのですが、数年後、彼女に再会すると、彼女は成金の軍事産業の社長の妻になっていた。主人公は、自首し、死刑になるんですが、最後に相対する国家に「自分の殺人は、大量殺人に比べると、まだ未熟だった」というような言葉を残します。映画を見たときに、国家が人の命を奪っていくということは一体どういうことなのか、強く印象づけられました。個人が、身近な人間関係のなかとかいろんなトラブル



の中で殺人をするということと違って、国家が人の命を奪う場合には、基本的には、国家がそれに対して罰せられるということがないわけですよ。戦争を起こしても国家自体がそれを罰せられるということはない。じゃあ私が国家とどういう立場にあるのかというと、結局、私たちはその当事者なわけですよ。ということは、戦争も死刑も、私自身が基本的には殺しているのと同じ、その一員である。結局、死刑を存置し続けているということは、原発が動き続けていることと同じように「私自身の責任」というか、私自身がコミットしている問題だなという認識でおります。

原発というのも、事故が起きてこんな大変なことになってしまいました。私自身、事故前も関心は持っていたけれども、報道も小さな小さなかたちでしかできていなかったと反省しています。でも原発というのは、例えば、原発労働者たちは必ず被曝してしまう構造があるわけです。原発はその人たちなしでは成り立たない技術なわけなんですよけれども、そういうものを国家が存続させ続けているということ自体、自分が生きている間の大きな責任のひとつだなという認識で、この二つの問題というのはとても似たようなものとして捉えているところです。

2、東電の社長を死刑にしないわけ

安田 では、これから少し議論をしていきたいと思えます。昨年、「震災と死刑」というテーマで討論をやったことがありました（『年報・死刑廃止2011』）。その一人として神田さんに出させていただいた際に、突然神田さんから言葉が出たんですね。「東電の人たちは死刑にならないんですか」と(笑)。「あれ、まずいこと言っちゃったわ」という顔をされていたんですが。我々、そういう気持ちはあるだろうと思うんです。おそらく東電の、特に前の社長の自宅に行くと、「死刑にせよ！」と声を上げようじゃないかと言ったら、たくさんの方が来ると思うんですね。まずその「声」を、話された神田さんから弁明いただいて(笑)、それに対して白石さんがどうお答えになるのか。つまり神田さんの思いを、どう止揚していかれるか。

神田 去年、思わず安田さんに向かってそのように言っていました。「あ、ここは死刑廃止の集まりなんだ」とすぐに気がついたわけですが。でも本当に、私は、あの勝俣っていう人ですか。あの人は事故以来、一度も結局福島に入ってこなかったんですね。人間として

最低じゃないですか。そうしてお金をもらって天下りしていますよね。あの事故の責任をとって辞めた人は、誰もいない。こんなバカなことはありませんか。

私の実家は福島県のいわき市というところで、線量的には関東のホットスポット並みぐらいのところですよ。福島県内では低いほうなんですけれども。ここで、さっき太郎さんがおっしゃったように、とても高い所に子どもたちが住んでいる。それを指を咥えて見ているしかないこのもどかしさ、悔しさ。福島県人は人間じゃないんですか？って、そういう憤りがいつもふつふつと沸き上がっているんですね。

二、三ご紹介いたします。30日の集まりで、福島からの声でございます。佐藤幸子さんが最初に言っています。「毎日が、台風が来たような生活を1年半送ってきた。放射線量も土壌も危険が解消せず、あちこちにホットスポットがある。先日、仮設住宅そばで18.8マイクロシーベルトを観測した。母さんたちは毎日、『ここは大丈夫？』『ここは大丈夫？』と確認して生活をしている。私は、昨年7月から今まで、積算線量計は1.9ミリシーベルトだった。多くの人々が不安のなかで避難できないでいる。現地で闘っていた人々が避難したために、現地で動ける人が減っている。野菜については、県外から野菜を支援している。助成金など、人件費に対してお金を出していないことが、問題だ」と、おっしゃっています。

それからもう一人。双葉町町長の井戸川さんです。「私は、放射能とは闘うものではなく、それから逃げるものだと考えている。今の戦いは、長い時間のなかの短い時間である。町民をなぜふるさとに戻さないか。戦場に、非武装の国民を置いておく大将はいない。戦場には兵士を送るのみだ。福島県で進められている安心教育が一番の課題である。県民は、政府、東電から嘘をつかれ、情報を後出しされてきた。町民の家系を継承すること、町民の命と財産を守ることが私の使命だ。子どもが安心して住める環境を取り戻すことが大事だ。子どもを持つ母親たちを県内に住まわせることは危険であり、そうすると私が加害者になる。放射線量1ミリシーベルトだった限度を、20ミリシーベルトに変えられてしまった。私たちの肉体の除染をしてください。東電の加害責任も曖昧にされようとしている。無主物はありえない。四日市や水俣に戻る。日本の人口が減っていくのだから、電力の本当の需要予測をするべきだ。54基の核燃料の処理はどうするのか」。

いま二つほどご紹介いたしました。福島県の人たちは悶々として、毎日毎日、「自分たちはどうなるんだ」、「この責任を誰が取ってくれるんだ」。そういう不安の中で、もちろんこれは福島県だけではなく、放射能は見えないですから、いろんなところに拡散しております。国民を、これだけ不安に陥れている張本人たちが、なんの責任もとらない。この国の政治家に、死刑判決を下す権利はありません

ん！ 私はそう思うんです。みなさんいかがでしょうか。（拍手）すいません、講談師なもんでね、ちょっとスイッチが入っちゃいました（笑）。

安田 本当にそうですね。死刑も原発も、ほとんど情報が隠されてきた。それだけでなく、意図的に誤った情報が垂れ流されてきた、これは共通していると思うんですが、しかし、今回の事故を契機としていろんな情報がオープンになってきた。もちろんそういう中でも、いまだ相当コントロールされているんですけども、みなさんの努力で少しずつ真実が明らかになってきているわけですね。

そういう中で、国家あるいは当事者である東京電力の中身。そして、あの数日の彼らの実態も明らかになってくる。その中で、原発の危険性だけではなく、それを推進してきた人たちの「犯罪性」というのも出てきたわけですね。そういうところに神田さんは怒りを込められたわけですね。そういう人々に対する思いを抱きながら、白石さんはどういうふうな話を進めていっていらっしゃるのかをお聞かせ願えればと思うんです。

白石 いま神田さんの話を聞いていて、もう私なんかもいつもオフィスで「あんなの、殺してしまえ！」みたいなことをしょっちゅう（笑）。清水社長や勝俣会長だけではなくて、あらゆる責任者に責任をとってもらわないと、というような感じで、ぎゃーぎゃー言っています。

でも結局、「責任とは命以外にないのか」ということなのかなあと、今のお話を聞きながら思いました。つまり、「償う」とか「責任をとる」ということで、もちろん怒りがあるから「殺してしまえ」と思ってしまうんですけども、今、とってもらいたい責任は、例えば福島県の例でいったら、できればあの方々は第一原発で働いていただきたい、あそこできちっと最後まで身体が動く限りは最前線で指揮を執っていただきたいというふうにも思ったりします。また国としては、食べ物の問題などを含め、子どもたちの被曝防護に対して最善を尽くすとか。きちんとした責任をとらせていくのに、死んでもらってはむしろ困る。生かしておかなければならないと思います。今回の組閣で、細野さんが党の仕事のほうに入ったんですけど、本当は、生涯、原発担当大臣をやってもらおうとか、この問題に対して向き合うということを規定していきたい。同様に、死刑の問題も、命以外でその人なりの償い方があるんだろうなと思う。憎くて、憎くてしょうがなくとも、そうではないかたちというのをとる、とらせるということが、一つ重要なかなというふうにも思っています。

3、世論をどう変えるか

白石 それでちょっと話が変わってしまうんですが、原発はいま世論が大きくて、死刑というのはそんなに世論は大きくない……。

安田 大きいどころじゃありませんね。ひどい状態

なんです。

白石 思い返すと、今はみんな「勝俣」とかって怒っていますけれども、去年の3月あるいは4月上旬の朝日新聞の世論調査では、70%が原発は「継続」だったんですよ。そのときに「廃止」と言っていた人は、20%ぐらいしかいない。事故前とほとんど変わらなかったんですね。私はそのときに、これは本当にどういうことかと思いました。ドイツではすでに大きなデモをやっていました。私たちはメディアだから、一応「伝えている人」なんです。誰かの声を伝えていきたいなと思っている。その時に、私たちが最初に取材して影響力があったのが、城南信用金庫の吉原さんという方なんです。4月に「原発に頼らない社会へ」というのをホームページに出されたことを知って、すぐにインタビューをしに行きました。そうしたらとっても反響があったんです。そのときには、原発反対ということ自体を言えない雰囲気だったんですよ。自分がそれを問いかけて、言ってもいいよ、という感じになっていない。同調圧力が強く、声を上げにくい状況の中で、経済界の中で、信用金庫の中のトップにある会社の代表が堂々と、はっきりとものおっしゃった影響は大きかった。これを契機に、みんなもっと自由に考えていいんだ、言っているんだ、ということが芽生えてきたと思うんです。

また時期を同じくして、高円寺で若い人たち中心のデモがあって、初めて「あ、声を上げていいんだ」という盛り上がりがありました。そのあと登場したのが山本さんです。山本さんが、5月頃から「学校20ミリシーベルト基準」の政府交渉の現場にいらっしゃるようになる。「あ、タレントでも大丈夫なの？」という（笑）。干されているんじゃないかと心配しながらも、つまり「言ったらなにが制裁される」というなかで、声を少しでも出していいと思えたことが、全体を動かしてきて、いま8割ぐらいの人が反対となった。

だから死刑も8割ぐらいの人が死刑賛成と言っていますけれども、しっかり話してみると、わからないんですよ。ただ、いま死刑反対って、すごく言いにくいタイミングにあるなとは思っています。

安田 私は、起こった問題の先行きについてもしっかり考えることが必要なんだろうと思うんです。先行きというのは、さきほど山本さんがおっしゃった、私たちの怒りというものは、どういうところから生まれてきているのか、そして相手がどう動くのかによって、どう変わっていくのかというんでしょうかね。死刑の問題でいけば、被害にあった人の怒り、悲しみ、苦しみというものが、何によって緩和されるんだろうか。相手を殺すことによって緩和されるのか。例えば原発の問題でいくと、東電が「私たちがやっぱり間違っていた、原発を廃止します、廃止したなかでの社会をつくっていきます。それに全面協力していきます」という話をし、16万人の人たちに寄り添って、会社を維持していくという話であ

れば、おそらく新しい展望ができて、神田さんの「あんな人、死刑にしてもいいじゃない？」という話も、違う方向で大きな広がりを持つてくると思うんです。いま、山本さんが変わってしまったって言うていいんでしょうけれども（笑）。本当の運動の中心になっていらっしゃって。例えば子どもたちの集団疎開の裁判にしろ、いろんな裁判をやり、官邸前のデモをやり、文科省に対するデモをやり、東電に対するデモをやってらっしゃるんですけども、原発運動は、どういう方向にこれから進んでいきそうか、拡大していきそうかというふうに考えてらっしゃいますか？

山本 まだこの市民運動に入って1年ちょっとなのでルーキーなんですけどね（笑）。手さぐりの状態というか。でも、凄いいことだと思うんですよ。というのは、よく「手ごたえを感じますか？」とインタビューで聞かれるんですが、でも僕3・11前は市民運動に参加していなかったんで、その「変化」というか「事故前—事故後」というふうに見れていないんです。けど去年の9月、明治公園であった集会では6万人が集まった。今年、代々木公園で行われた集会では17万人が集まっている。ひょっとして最近まで無関心だった人たちが興味を持ち始めているという部分があるかもしれないです。でも、それだけの人が集まろうか、官邸前に何人集まろうか、その声は無視し続けられるんだなって、いまのところ。これはやっぱりまだまだ人数が足りないんじゃないかなと思うんですよ。だから10万人単位だったら、向こうも何とか無視できる。大きな音として処理できる。これがおそらく連日100万人の人々が国会を包囲し続けられるぐらいのものがないと、多分この先ちょっと変わらないんじゃないかって。

だって、自民党総裁選の演説なんて全員そろって原発そのまんま、というか推進でしたよね。軍備増強で徴兵で。すごい世の中になってきましたね（笑）。やりたい放題じゃないですか。でも、いま目の前にある危険というか、このまま自分たちが本当に生きられるのか、生き延びられるのかという問題に対して、たくさんの人たちがアジャストしてきたというか、そこにフォーカスできてきたわけですよ。だからこれは変えられるんじゃないかなと思っているんです。

でも、報道ひどいですね！ なんであんな酷いんですか？ テレビとか新聞とかって偏っていますよね。まるで自民党総裁が次の首相になりましたみたいな報道です。それだけじゃなくて、維新のこともそうだし、ナショナリズムを煽った部分にすごく時間を割いている。これからの新しい強い日本というスタイルを刷り込んでいる。僕ずっとエンターテインメントの世界にいたわけですよ。今もいるんですよ、仕事がないだけで（笑）。21年間仕事をやって来たんですけども、スターを作り上げるのって簡単なんですよ。要は、大きな事務所とか政治力のあるところがパイプを使って、「じゃ、こいつを出せ」と

いうことでテレビに露出し続ければ、みんなの脳裏に焼きつくんです。刷り込まれるんです。スターだという認識になっちゃうんですよ。ニュースの報道ってそれと同じことなんです。ずっと流し続ければ、「あ、なるほど、もういま変えられるのは自民党しかいないのかもしれないな」みたいに。本当にさじ加減一つで、勝手に僕たち誘導されちゃうんですよ。そこがすごく怖い。

でもマスコミは完全にグルですよ。グルという言葉はちょっと失礼なのかもしれないです。商業放送ですもの、しょうがないんですね。テレビなんか15秒に1回コマーシャルが流れている。だから、お金を出してくれる人は絶対的な存在なんです。だから企業に対して不利益な発言、その人たちの思惑以外のことを発表するというのはすごくリスクなことなんです。だけど、その部分を変えられるとしたら、やっぱり一人一人の力だと思えます。例えば首相官邸の前に毎週何万人を超える人々が集まっているということは、もう事件じゃないですか。でも、なかなか報道されない。それに怒りを感じた人々が、メディアに対して電話とかFAXとかメールでどうして流さないんだとクレームを入れ続けた。それが効いて、結局は報道されるようになったんです。だから、変えてはいけるんです。一番大きな勢力というのは、僕たち消費者が最大の勢力じゃないですか。その力を結集していかないと、いいようにされるだけです。だから原発という部分において、「どうして報道されないんだ」という部分がみんなによって少しかたが変わってきた。というのと同じように、例えばこの死刑という部分に関して、たくさんの人たちがアプローチすれば、それは変えていける問題だと思うんです。もっとたくさん報道されるようになる。ただ「死刑が執行されました」ということが流れるということだけじゃなくて、死刑そのものについて、もっと議論されるような番組作りとかプレッシャーを与えられると思うんです。ごめんなさい。ちょっと質問と話がズレましたね。これから原発、市民運動どうなっていくのかという……。

4、人々の思いを政治に活かすには

安田 私は先週金曜日に官邸前に行ったんです。雰囲気が大変緊張し始めているんですね。なんで緊張しているかという、自由な市民の運動に対して、国家の影がどんどん色濃く出始めて、あの場の雰囲気。例えば、歩道は半分に狭められていて、ロープが張られていて、そこからなかなか歩かせないというような状況。おそらく、僕なんか常に悲観的に見るんですけども。あの半分が来週、再来週に行くと、気がつかないうちに40センチぐらいに狭くなっている。次には20センチ。とうとう、一人ぐらいしか立てないぐらいなところまで、知らないうちに追いやられてしまうんじゃないだろうか。そういう、彼らの周到なやり方が見えてくるような気がしましてね。

山本 すごいですよね、本当にね。

安田 国家がよいよ顔を出してきたのかなという感じがしてきたんです。

それと同時に、このかん、ずっと続いている「国境紛争」報道が原発を覆い隠すようなかたちでどんどん増えてくる。つまり、反原発というのは山や川や海を越えて、そして言葉や文化を超えて、みんなが安全に生きていこうという話ですから、そこには国境なんか無い。ところが、「国境紛争」は、「日本国」を隣国から守る、しかも軍事力で、極端な場合は核武装でもして守れというものですから、反原発と全く相容れない話なんです。ですから、少しづつ考え方も雰囲気も情報の量も含めて、反原発もだんだん厳しいところに行くのかなという感じ、不安感というか、そういう閃きを思ったんです。そのあたりのなかで、今後どうしていくかというのをお聞かせ願えればなと思って。

山本 本当に難しいですよ。何万人も集めた官邸前、前は歩道だけじゃなくて一車線つぶして人が通れるようにしてくれていたんです。というか、それぐらい人が集まっていた。でもそれが柵が作られたことによって、歩道の中に収められた。しかもその歩道も半分にして、人が立つところと通行するところと、どんどん狭くなっている。そのうち爪先立ちで立たなきゃいけないような世界になっちゃうかもしれないですよ（笑）。

だから例えばですけど、「柵ができるらしい」という話になったときに、「じゃあもう官邸前はナシだ」と。「今週は文科省前にしようぜ」。その大きな流れを、また別の場所に移していく。実際、今はそれぞれに言いたいことがあって官邸前、経済産業省前、文科省前、財務省前、官邸裏にみんな別れて抗議している。霞が関全域、いろんなところがフェスティバルみたいな、「官邸前、ただいま1万人です」「文科省前、今5000人います」「経済産業省前、2万人います」みたいな、もうみんながぐるぐる回るような音楽のフェスみたいな感じでやっていく。1カ所に集中するようになったら、向こうも取り締まらざるを得ない状況になってくる。その動きが大きくなれば大きくなるほど困るわけだから。だからそういうふうには、どんどんその近隣に場所を移していくことができれば一番いいんです。やっぱり人がたくさん集まらなないとニュースにならない。

安田 そのニュースの問題では情報源と一緒にですね。例えば、「OurPlanet-TV」が大変大きな役割を果たしているだろうと思うんですけども。それを担ってきて、一生懸命今も情報発信していらっしゃる。情報発信することの意味とか大きさとか力ということを、どういうふうには白石さんは実感していらっしゃいますか。

白石 私たちも、もちろん原発事故のあとにずっとこの原発の問題をやってきました。いま道路の使用規制の問題が出ていたんですが、道路使用規制同様、電波の使用が、他国に比べて日本の規制は厳しいわけなんです。そもそも国が直接電波を管理している

のは日本と北朝鮮と中国ぐらいです。あ、死刑と同じだ！みたいな感じなんです（笑）。例えば、アメリカなどは、この電波の分野は、FCC（連邦通信委員会）という独立機関がやっています。なぜかという放送メディアを国家が直接管理すると、必ず言論を統制していくので、ヨーロッパはもちろんのこと、アジアの国なども、基本的に、政府とは別の独立した機関をつくって管理する、というかたちになっています。

また、メインストリームの民放とか公共放送以外に、パブリックアクセスという市民が参加できる放送制度をとっている国も少なくありません。とりわけヨーロッパでは、ラジオあるいはテレビの一部を使って、市民が放送する独立系非営利メディア、コミュニティメディアというのが、80年代以降大きく広がっています。例えば、ドイツの緑の党は、もともと海賊ラジオでした。原発反対をしているライン川沿いのフランスの海賊放送をドイツ側で受信して、そしてドイツのほうでもフリーラジオというかたちで海賊放送をやっていた。それが原発問題だけでなく、いろんな社会問題、あるいはコミュニティの問題をどんどん発信していくうちに一つの社会運動の勢力となり、最終的に緑の党というかたちでそれなりの勢力を保っています。そういった、電波を使って市民が半ば海賊的にどんどん広げていくことで一つの政策を転換させてきたという歴史もあります。

それからアメリカもヨーロッパも、コミュニティのラジオというのは、基本的に非営利の市民のラジオがほとんどです。フランスのラジオトレドという放送局では「刑務所の声」という番組をやっていたり、受刑者の人の様子を伝えるもの、あるいは受刑者に対して家族が声を寄せるみたいなかたちで、いろんなマイノリティのひとつとして犯罪の加害・被害側を含めて、いろんな声を社会に届けていくという役割を放送局がやっています。同じように、移民とか、LGBTとか、様々な人たちがいろんなチャンネルを使って情報発信している。ラジオというのはコミュニティベースで広がりを持って聞かれてるものです。またドイツの場合、受信料の2%が、独立系のドキュメンタリストやオープンチャンネルと呼ばれている市民のテレビ局に配分されています。市民のテレビ局オープンチャンネルは、地域ごとに、原発だとか、失業者の番組だとか、いろんな番組を流す。

私はもともと大手のメディアにいたので、「OurPlanet-TV」を始めたときは、あまりそのことを知らなかったんです。日本のメディア状況はよく「杉林」といわれていて、大きい高い杉はあるんだけど多様な草が生えていないんですね。ヨーロッ



パのメディア状況は、どっちかという「杉林型」じゃなくて、「雑木林型」、大きい木もあるけれども、下草も生えていて、多様な植生がある。単一種の森はいったん雨が降れば、地すべりが激しく、弱い一方、多様性の確保された森は強い。日本では、大手のメディアからワンパターンな内容しか流れてこないもので、そうじゃない異質な意見がじゃんじゃん流れていくような環境を、道路とともに獲得しないといけないという気持ちで、現在の原発問題も報道していま

す。
安田 私もこの話を大変面白く興味深く聞かせてもらったんです。特に監獄に入れられている人が、もちろんそこでは放送局を持ってないんですけども、外とタイアップして「今日の監獄 東京拘置所」とかね（笑）。天気予報と同じように「今日ほとんどない看守がおりました。『おい、お前』なんて私を呼び捨てにしたんです。そいつが、ただいま、ガンを飛ばして迫ってきています」というような実況中継でもやりはじめると、中の状況が広く伝わっていった、何とかしなきゃ、という話になってくるんだろうと思うんです。

7、8年前、ある人が東京の東の地区でFMのラジオ局を開設したんです。これは半径10km以内しか届かないのだけれども、これを有線で繋げば、おそらく東京都内で5、6カ所ぐらいの放送局を用意すれば、東京全部に放送が伝わるんじゃないだろうかとやり始めた人がいらっしたんです。最近音信不通になってしまって、それが消えてしまったのかどうかわからないんですけど。いま話をお聞きしていて、原発と死刑と、もう一つなにか三つ合わせたミニ放送局でも作って、その10km範囲内のFM放送局とネットワークを組み、情報の新しいネットワークをつくり出していくというのは面白いのではないかなと思うんです。それで、死刑と原発がまず一緒に重なる神田さんがそこをぱっとやると、あの和歌山カレー事件の眞須美さんの声が出てくるというようなことができて。そしてそのあとすぐ、その音楽が出て、そして太郎さんが反原発で、「今度は官邸の前だけじゃなくて、100万人ぐらい集まるためには、まず今日は5万人集まりましょう」というような感じをやり始める。そういうネットワークが作ればなという感じがするんですね。

5、メディアを私たちの手に

安田 白石さんが、いわゆるインターネットのネットワークというものが、広がりそうで広がらない、一定の限界があるんだということも指摘していられっしたんですけど、そこらあたりを聞かせても

らえればなと思うんですけれども。私たちがこれから新しい情報のネットワークを作っていくについては、どういうネットワークづくりが必要なのか。

白石 私も最初はインターネットで相当メディアの状況が変わっていくことができるんじゃないかと思ってはいたんですけれども、やはり限界がある。とりわけ、福島だとインターネットの普及率は3割ぐらいなんです。つまり、情報を得る人と得ない人の格差がどんどん広がってしまうというような懸念がある。私なんかが一番伝えたいシングルマザーのお母さんは携帯でメールぐらいはやるんですけれども、パソコン自体を持ってないわけです。結局、インターネットの中心層はどうしても都市部に住んでいる30～40代の男性が多い。東南アジアでは携帯電話が発売されると、これは女性たちの武器だといって、携帯電話を自分の武器として情報発信に使えるような教育をしていますが、日本の場合あくまでもビジネスなんです。コミュニケーションをビジネスに置き換えてしまう。そういうことがとても強くて、格差が広がるばかりというところ。さっき、「機関誌みたいなものじゃなくて」と言ったんですけれども、やはり機関誌も回路をどういうふうに増やしていけるかという意味で重要です。本当に将来的にはNHKに「2車線開放」というのをしてもらえたらと思います。

テレビがデジタル化したというのは、データの圧縮によって、電波が送れるエリアが3倍広がったことを意味します。教育テレビなどは、ハイビジョンを放送していない時間も多いため、実は2車線分、2チャンネル分空いている。そこで、今は埋めるためにわざわざ再放送などを流しているのですが、そこを市民に開放してもらおうと、神田さんの番組や、そして山本さんが自由に表現したり発言できる番組が放送できる。みんなでお金を出して非営利でやっていける。ましてや受信料の2%が入れば、NHKの受信料収入は約6700億円程度なので、134億とか信じられない金額なので潤沢にみんな番組制作ができちゃう。いま受信料も10%値下げしないとイケない。10月1日から7%値下げしている。あと残り3%をどうするか。日弁連なんかはぜひとも「3%は市民還元しろ」と呼びかけてほしい。みんなのチャンネルに教育テレビ2チャンネル分を開放すれば、社会は相当変わるんじゃないか。実際には韓国でもKBSという公共放送で、そこは1時間だけなんですけれども市民の枠があるんです。NHKに週1回自由にできる1時間枠があったら違いますよね。

神田 それって具体的にどんな方法を使えばできる可能性があるんですか？

白石 NHKの問題は経営委員会とか、あるいは理事の人たちで決めていく問題なんです。でも、基本的には世論ですね。本来、私たち全員NHKのオーナーじゃないですか。そういう声があがって「開放」ということができれば、1チャンネルのなかに「神田チャンネル」があったり山本さんのコーナーがあって、もう言いたい放題ということは可能

だと思っています。

神田 それは、ぜひなんとか実現してもらいたいですね。といいますのは、林眞須美さんの「青空通信」というのが時々来るんです。これ彼女の日記なんです。非常に笑えちゃうところがある。彼女のキャラクターというんですか、「負けてたまるか」みたいななかに、ちょっとおちゃめな文章もあったり、お花が好きで花言葉を書いてみたり、そういったところも紹介できれば、彼女のイメージも変わっていくと思います。それからさっき読み上げました福島県の人たちの声。国民のお金でNHKはやっているんですから、福島の声、あるいは被災地の声ということで3分でも5分でもいいから、一日必ず流すべきだと前々から思っているんです。えーと1車線じゃない、1配線でしたっけ（笑）。それももう国民の声ですか。「再稼働反対」ということと一緒に「NHKを市民の手にー！」みたいな感じでやっていく。毎週金曜日の官邸前、官邸裏のいろんな集まりというのは、全国でもやっていますので全国各地でその数を集めれば、私は相当な数の人たちが声を上げてくれると思う。なんとか実現したい。

ちょっと余計なことですが、一人一人が自分の思いの丈を声にして喋っていく、というのを私、講談教室でやっております。実は袴田巖さんの冤罪事件を講談にして頑張っている人もいます。あとスカイツリーを階段でみんなを上り下りして電力作っちゃおうみたいな、そういうことをやっている人もいます。ですから、もし、「よし、自分もこれだけ知識があるんだから、ユーモアもあるんだから、ちょっと講談にまとめてやってみようかな」という方がいらっしゃいましたら、神田香織の講談教室にお越しくださいませ（笑）。

安田 結局、情報の発信者を鍛えるということですね。声を通るように、大きな声が出るように。言いたいことをしっかりとと言えるように。で、太郎さん先ほどおっしゃりかけたのは？

山本 なんてしたっけ。さっきのNHKの一つの回線というか一つのチャンネルを市民側によこしなさいという話は、受信料の不払いというのと、交換できそうじゃないですか。

白石 そうなんです。だから受信料を払う代わりにそのチャンネルをみんなに分けてくれということは、普通にあり得ると思うんです。それを他の国はやっている。アメリカみたいに、大手のコングロマリットばかりの国でも、ニューヨークに行けば4チャンネル市民のチャンネルがある。これはタイムワナーがお金を出して、年間4～5億ぐらいでやっているんですけど、誰でも好きな番組を出せるんです。4チャンネルあって1チャンネルはカルチャー、1チャンネルはミュージック。宗教チャンネルと、もう一つ社会問題。例えば「デモクラシー・ナウ！」という硬派な報道番組もありまして、全米のネットワークで700ぐらいのチャンネルで見られる。アメリカの場合、ケーブルテレビが主流なのでそういうカタチですが、日本だったら、公共放送で世界で1、

2位を争うだけの規模の放送局なので、それが市民のために一肌脱ぐというのは、私は当然のことなんじゃないかと思います。

山本 そのなかで番組ができましたと。その審査というか、それをオンエアするかどうか決めるのも市民なんですかね。

白石 アメリカの場合は、基本的に早い者勝ちという感じです（笑）。ただレギュラーは、毎週何曜日みたいなのが抽選みたいなので決まっています。原則的には全部OKなんです。まったくタブーがないのがオランダで、どんなにエロいのも大丈夫なんです。アメリカはやはり多少ガイドラインはあって。昔は、KKK（クー・クラックス・クラン）が制作した黒人バッシング番組や差別的な発言が問題になった時代もあるそうですが、今は、視聴者や他の参加者が、そういうのはおかしいと抗議したり、対抗するのでそういうことはなくなってきてそうです。

いまむしろ問題になっているのは、コマーシャルっぽい番組。市民のチャンネルは宣伝はダメなんです。だから自分たちで表現するのはOKけれども、物の宣伝とかはダメ。でも、そういうものもやれば淘汰されるんだ、ということらしいんですね。ですから性善説に立っているというか。ガイドラインは、日本でいったら放送法になるんでしょうけれども。そういうことなんです。

山本 それはもうNHKの前でやっちゃったらいんじゃないですか。……とか言っちゃって、またNHKから仕事こないじゃないですか（笑）。もらえるとは思ってないですけど。

安田 記事なんかによると、受信料の2%ぐらいはそっちのほうの予算で組んでいくというのが常識化していますよね。そういうことが、なかなか私たちのほうには届いていないから、要求していくことができなくなっている。そうすると公共放送に対して、おそらく一定の時間枠で、違うチャンネルで同じ放送の機会を設け、市民に開放する。その要求と同時に先ほどから出ている自分で放送局、ミニコミをつくるということも必要のかなと思うんです。インターネットは確かに大変普及しているんですけど、やっぱり自分からアクセスしていかなくちゃならないという大きな課題がある。ところが、リスニングという耳で聞いているという話ですと、なにをしながら聴くという、ラジオ独特の良さというものがあると思うんです。ですから、いろんな媒体を通して、いろんなテーマを3つ4つ合わせながら進めていくというのができればなという感じを持っているんです。そのなかで白石さんが、よくぞこちらに来ていただいた。また新しいアイデアを出してほしいなど、ぜひここで3人でチームを作ってもらえればなと（笑）。

山本 ぜひぜひ。

6、名張事件・奥西勝さんを演じて

安田 やはり死刑に関しても、冷静でかつ柔軟、し



かも多数の意見を踏まえた上での議論が必要であろうと思うんです。

山本さんは、東海テレビの「約束」という映画で名張ぶどう酒事件の奥西さんの青年の頃、ちょうど逮捕されて死刑判決を受ける頃の役を演じられたのですが、どういう感想を持たれたか。もうすでに放映は終わっているんですね？ そういうことで、どういう反響などを感じられたかを聞かせていただければと思います。

山本 奥西さんの役をやらせていただいたのも、「死刑弁護人」、安田さんのドキュメンタリーのナレーションをやらせていただいたのも、東海テレビという名古屋のテレビ局なんです。今やもう、そこからしか仕事がないんじゃないかみたいな（笑）。半年に1回ぐらいお声掛けをいただくという、非常に今のライフラインみたいなことになっているんですけども。

本当、どれぐらい骨があるか、どれぐらい気合が入っているか、どれぐらい何を伝えたいかという考えを持って番組を作っているかということだと思うんです。そういう機会を与えてもらえるのは、すごくありがたいことです。

だって僕を使うということになったら、間違いなく営業から大バッシングなんですよ。「どうしてお前、それ使うの？」って。言ってみればジョーカーみたいなものじゃないですか。「お前、いまジョーカー出すなよ。違う人でもいいでしょ？ 代わりはいくらだっているでしょ？」というところだ思うんですけども。おそらく、そういうところとも戦って下さって、実現したことだと思うんです。

実在の人物を自分が演じるって最悪なんです。全編ドラマで作られればいいんですけど、ドキュメンタリー映像も流れるわけです。だから見ているほうとしてはすごくしんどいんですね。でもお仕事もらえたということも嬉しいのですが、そういう事件があったということも知らなかった、世の中にある不条理みたいなものを、役を通して感じる事ができたのはものすごくありがたいことです。

で、もう一つ。「死刑弁護人」。安田さんの映像を見た時に、今の安田さんを、日本にいる芸能界で役者が誰かできるかという、無理なんです。もう、とんでもない表情するんですね。オープニングの映像、ご覧になった方、わかると思うんですけども、その集中力に圧倒されるんです。家に帰って安田さんのマネを鏡の前でやってみたのですが、全然違うんですよ。やっぱり本物が持つオーラというか、やっぱり信念で生きている方はすごいなと思いました。そういう意味で、すごく勉強になったという部分もあるんです。今まで自分が興味を持たなかった、そういうことが存在しているということも知らなかったし、作品を通していろんなことを教えてもらっているのはすごいありがたいです。この死刑廃止のイベントに出させていただくというのも、やっぱり実物にお会いしたいし、死刑という問題に対して、僕の中でフォーカスするきっかけになったということは、すごく大きなことなんです。

例えば、僕が原発のことをやる。沖縄の基地の問題だとかオスプレイのことをツイートしたりだとか、死刑の問題だったりということを使うと、「あいつ、いろんなところに首突っ込んで、反対、反対って言う商売みつけたのね」、「あいつ、TPPにも行きよるなあ」、「儲かってんな〜」。そんな話にもなるんですけど、違うんですよ。すべて繋がっているんです。よく、原発の問題でもシングル・イシュー／マルチ・イシューみたいな話にもなったんです。「再稼働反対だけを言うべきだ」と。でもそうじゃない。「子供たちの避難もあるんだよ」だったり、被曝労働者の問題もある。もちろん、一つの問題じゃない。いろんなことが繋がっている。弱者への押し付けなんだという部分に気づいたのが、この原発の問題だったんですけども、それを入口に、東海テレビという存在と出会うことができた。で、死刑問題という部分に関して、安田さんに気づかせていただいたという部分がある。やっぱりこれは全て同じ問題として、例えば自分の体が空いている時には、死刑の問題でアクションがあるときには参加したいと思う。それはいろんな人がいろんなところに、支援を支援で返すというか、いろんなところに出かけて行って、社会問題ということに光をあてなきゃいけないということに気づいた。「おまえ、反対、反対ばかりやな」と言われるんですけど、そうじゃないんです。あまりにもおかしいことが多すぎて、反対、反対と言わなきゃいけない世の中なんです。この社会構造自体を変えるということを目指していかないと、何も解決できない。ごめんなさい。また質問と違うこと言っていますね。

7、発言し、行動し、人と繋がる

安田 僕はいま、太郎さんの話を聞いていて、日本の大変さというのがよくわかるような気がしてました。いま世論調査をやれば8割近く反原発です。それだけの多数の人が反原発を支持していて、その

先頭に立って一生懸命頑張っている太郎さんが、表に出ると仕事を干されてしまう。なんでこんな馬鹿なことが起こるんだろうか。神田さんも、主張しながら、なおかつ私からすると営業活動もしていらっしやる。その大変さというのは共通したものを持っていらっしやると思いますけれども、でも大変気楽にやってらっしゃいますよね。それは何でなんでしょう。

神田 気楽に見えるかもしれませんが（笑）。端っから大変といえば大変なんです。NHKからも東海テレビからも声がかからない（笑）。26年前に「はだしのゲン」という作品をやり始めた頃は、まだ世の中ちょっと違っていたんですが、それからずっと世間様から社会派と言われていた演目が多くなっていくにつれて、メディアから本当に声がかからなくなりました。でも本来は、講談というのはライブで聴いていただくものだと思っておりますので、めげずにやっているんです。

その昔、講談師というのはジャーナリストだったそうですよ、白石さん。テレビもなにもない時に戦場に行って、戦の様子を見てきた人が、大勢の前で語ったのがおこりだと言われているんですね、500年前。それが私、心にぐっとひかかりまして、「よし、じゃあ」ということで。本来は古典の伝承でやっている方が多いんですが、忠臣蔵だって、その時代は大きな事件だったわけです。だったら、それよりも大きい3・11を語り継いでいきたいし、いかなければならないなんて思っているんです。でも確かに厳しいです。はだしのゲン、チェルノブイリ、フラガール、津波の「稲むらの火」、それから米軍機が墜落し横浜市緑区でお母さんと子どもさん2人が亡くなった35年前の事件も講談にして語っているんです。そういうことで「いま世の中に繋がっているから、忙しくて儲かるでしょう」と言われますが、忙しくはなりましたが、儲かることはありませんね、不思議ですね〜（笑）。でも、私のスタートはそこでしたから。理不尽な目にあって、「なんでこんな大変な目にあわなきゃいけない」という思い。生きている限り、必ずありますよね。そんな時に、その気持ちを共有していくと、力になることができるんですよ。

3・11でふるさとがやられちゃったんですよ！「チェルノブイリの祈り」という講談を10年前からやっているときには、「日本で絶対にこんなことが起きてはいけません！」という思いで語らせてもらったのが、ふるさとがやられちゃったんですよ。しかも最近、東電が事故の時のビデオを公開しましたよね。「すぐに海水注入するぞ」という意見に対して、「いや、注入したらもう使えなくなるからもうちょっと待ってよ」とやっているんですよ。ああいう人たちがボケーツとしておかげで、こんなふうになってしまっているんですよ。……また怒りがこみ上げてきましたけれども（笑）。で、本当にめげれません。私、講談やってきたけれど、なんにもならなかったじゃないか。でも私がめげてるどう

するんだ。もっと大変な思いをしている人がいっぱいいるじゃないか。めげてる場合じゃない。こうやって繋がって繋がって繋がって繋がっていきしかない。私が落ち込んでいたら、あっちの人が元気になる。そういう繋がりを作っていこうというので、さっきも冒頭で言いましたが、「ふくしま支援・人と文化ネットワーク」というNPOを立ち上げさせていただいたんです。会員も募集中でございませぬ。みなさんもよろしくどうぞ(笑)。

安田 発言していくことの大変さというか、行動することの大変さがひしひしと伝わってくるわけですけども。例えば白石さんなんか、発言していくこと、つまり一番大きなもの、標的というのは大手メディアに対するいろんな発言をしていらっしゃるわけですけども。いま太郎さんとか神田さんのお話になったような体験をされたことってありますでしょうか。

白石 私たちは本当に小さくて、影響力もそんなにないものですから、それによってなにか圧力を受けるということはむしろないんですね。圧倒的にお金がないということ以外は。個人の寄付というか、おひねりが飛んでくるみたいな感じで。で、面白いんですけど、やはりなにかパーッとみなさんが心に残ったり、あるいは見たいというものを出すと、夜中じゅうジャラジャラジャラとおひねりが入ってきます。割と直接的にそういうかたちで入ってくるんですけど、基本的には少額のお金がバラバラ入ってくるような、そういうなかでやっているの、そういう意味ではなにか圧力がある、ということはないです。

一般的にどこかスポンサーがあるわけではないので、企業から圧力ということはないんですが、よくチェックしてる人は、よく見てるなあという気はしますね。あと、公安警察は以前、自ら告白してきたのですが、よくチェックしているようです。

8、再び原発と死刑について

安田 いろんな話をいろんなテーマで話してきたんですけども、ぜひ今日聞かせていただきたいのは、「原発と死刑」。そして「反原発と反死刑」という共通の課題のなかで、自分はなにを考えて、なにを訴えたいかということについて、お一人ずつスピーチをいただいて、今日のシンポジウムを終わりたいと思います。

山本 本当に情けないんですけども、30を超えて40を前にして、やっと社会というものを見つめる機会を得たんですね。これぐらい強烈な出来事があれば、目を向けられなかった自分に対しても怒りを感じるんです。それが原動力になっている。自分を含めた無関心が作り上げたこの世の中に対して、やっぱり憤りを感じるし怒りを感じる。だからこそ変えたいなとも思うんです。いま地震の活動期で、原発でたらめで、それをまだまだ進めていこうとしている。汚染食品も流通したまま、僕たちは被

曝を強要される。国も事業者も賠償しません。なにも面倒みません。情報だけが隠されるというような世の中において、いま、この日本の国に住む者たちは全員死刑囚のようなものだと思うんです。命を脅かされていて、あたり前のように、死んでもなにも問題がないかのような扱いを受ける。

だからこそやっぱり今、この状況を変えなくちゃいけない。この状況を変えるにはたくさんの人に気づいてもらわなくちゃいけない。死刑問題に対してずっとフォーカスされて運動してきた方々、この中にたくさんいらっしゃると思うんですけども、遅ればせながら死刑という問題に対しても、僕、やっと目を向けることができた。そういう状況になれたということは、古くからずっと活動されてきたみなさんの存在があったからだと思うんです。原発の問題をきっかけに、この世の中にあるいろんな不条理に気付いた。たぶん原発というものに対して意識できるようになった人は、その他のたくさんの方にこれから目が向いていくと思うんです。だから、一つだけの問題ではなくてすべての問題として、これからいろいろ変えていけると思うんですよ。逆に変えていかなかったら、本当に真綿で首を絞められるように、僕たちは殺されていくと思うんですね。次に核事故が起こらないのは、ラッキーなだけです。なにも安全対策されていないなかで、どんどん進められようとする。

でも、希望があるんですよ。みなさんのような存在があるということと、いま原発という問題をきっかけに、いろんな人が立ち上がっているということ。だからこの国は変えていけると思うんです。これからも、この死刑問題という部分に関しても、僕は興味を持ってというか、いつその立場に置かれるかわからないですもんね。自分がひょっとしたら冤罪でそういう目にあうかもしれない。みんなにその危険性がある国なんです。そういう意味で本当に危険だらけの国なんです。でもそれを変えていけるのは一人一人の力なんだと思ったら、やっぱり自分も原発以外のことでも、どんどん声を上げていかなきゃいけないなって、より一層強く思えた、そんなシンポジウムでした。(拍手)

神田 いま、太郎さんがすごくいいことを言ったと思います。「日本人は、死を待っている死刑囚」。大きなたとえですけども。私にはとても響きました。私たちのネットワークで9月の頭にチェルノブイリ・ツアーがありまして、ウクライナに行った人がこう言いました。ひまわり保育園の園児たちが5、60人おりました。みな、お人形のように座ったまま動きません。子どもたちははしゃぎまわるものだと思ってた彼女はびっくりしました。一人の子どもが、3つも4つも病気を抱えているんです。呼吸器系、心臓、そして骨の曲がる病気とか。それが、チェルノブイリ事故26年後の現実なんです。

放射能というのは、だんだん凝縮して行って、未来の人たちにとつてもない恐怖を残していくものなんです。まさしくいま彼が言った、「日本は静か

に死を待っている死刑囚」というたとえは、ここでぴったり符合しました。想像力を働かせて、絶対に避けていかなければいけないことは避けていくのが大人の務めだと思います。いままさに、チェルノブイリだったら、もうとっくに居住してはならない土地に福島子どもたちが学校に通わされています。そのために闘っている裁判があります。疎開裁判です。どうか、これにもみなさん関心を持って繋がっていただきたいと思うんです。それからやはり責任をとっていただくということ、福島原発の原告団たちが訴訟を起こして頑張っています。これにもぜひ繋がっていただきたい。

そしてなによりも、いま白石さんが言ったようにメディアを変えていく。市民のメディアを私たちが手にして、そして本当の情報を流して行って、私たちが安心して生きていけるような。いま、これから安心して生きていけるなんていうことは、とてつもない夢のような物語かもしれませんが、そこは知恵の使いどころだと思うんです。これだけの人がいたら、どれだけの知恵があるかは分からないと思います。今日、IWJで聞いて下さっている方も、いろんなことを考えてくれていると思う。それを発信していく場所、白石さん中心になって！（笑）ね。どうも講師は話が大きくなってしまいますけれども（笑）。今日は本当に、手ごたえのあるシンポジウムに声をかけて下さって、ありがとうございました。（拍手）

白石 実は、最初このお話をいただいたときに、山本さんと神田さんと私で、死刑のシンポジウムって、いったいどういうことなんですかと思ったんですね（笑）。山本さんのお話を聞きながら、それが一つの希望かな、というふうに思いました。「死刑廃止の業界」という言い方はあまり良くないかもしれないんですけども、私自身もいろんな社会運動を、かなり広範に取材しているんですけども、とりわけこの死刑の問題は、ちょっと私なども入りにくい。クローズドな雰囲気がしてしまうところがある。専門的でマニアック、法律家も多いというところで、素人は口出ししてはいけないのではないかとというような、心のどこかで死刑の問題に関心があったとしても、コミットしにくいテーマだと思うんです。

今回、「原発と死刑」というタイトルを立てて、神田さんは今までもずっと取り組まれてきていると思うんですけども、私と山本さんは、おそらく新

人みたいな感じだと思うんです。おそらく今回の山本さんみたいに、原発事故をきっかけにいろんな社会問題に覚醒する、いろんな問題の存在に気づいている人たちがとってもたくさんいるような気がします。いま、神田さんにご紹介いただいた裁判なども、多くの人たちが繋がって、そしていろんな問題も一緒に考えるという。その中におそらくこの死刑の問題も一緒に入っていくことが可能なテーマだと思っています。例えばシンポジウムをするにも、いろんな機関誌に何かを載せるにも、自分たちのメディアを使うにも、いままで死刑の問題をやっていた人に加えて、そうではない人たちをどんどんスカウトしていく。次の山本さんを次々に見つけ出して行って、そこでまた関心のある層を連れてくる。そういうことが広がっていくことによって、世論の形成が広がっていくのではないかと思います。

原発問題も、去年の3月のときに、日本ってどうなっちゃうんだろうと思った。もちろん、今でも危ういんですけども、少なくとも多くの人たちが、この原発問題に自由に意見を言えるようになって、官邸前などでも文科省前でもそうですけれども、普通の人たちそれぞれが、ものすごく素晴らしいスピーチをされるんです。これが本当に素晴らしいと思っています。この問題を自分のこととして考えられる人が増えている。今まではここに誘われていないような人たちでも、次々とスカウトして、この問題のある一面的な報道に打ち勝つような次の動きができる大きな一歩になるかなと思います。ありがとうございました。（拍手）

安田 今日は本当にありがとうございました。筋書のないシンポジウムだったわけですけども、それぞれ一つ一つ、貴重な話をうかがわせていただいたと思うんです。さきほど、日本の中でみなさん、私たちも含めて「死刑囚じゃないか」とおっしゃった。それはやっぱり原発をなくしていくことは同時に死刑をなくしていくことにつながるだろうし、その本質はなにかというと、やはり「生きる権利」というか、生きることを社会全体が、国家全体が保障していくということだろうなというふうに思うんです。

ぜひ、これをきっかけにまたいろんなところでいろんな意見を聞かせていただいて、私たちも頑張っていこうと思います。今日はどうもありがとうございました。（拍手）

死刑日録

12月4日、鳥取地裁（野口卓志裁判長）は上田美由紀さんに死刑判決。即日控訴。

12月11日 最高裁第三小法廷（田原睦夫裁判長）は阿佐吉広さんの上告を棄却、死刑確定へ

12月14日 最高裁第二小法廷（小貫芳信裁判長）は野崎浩さんの上告を棄却、死刑確定へ

（12月14日現在、死刑確定者135人）

12月27日 谷垣禎一新法相は首相官邸での就任会見で、死刑執行に前向きな姿勢を示し、死刑制度の見直しについては否定した。

死刑廃止チャンネルは <http://www.forum90.net/>

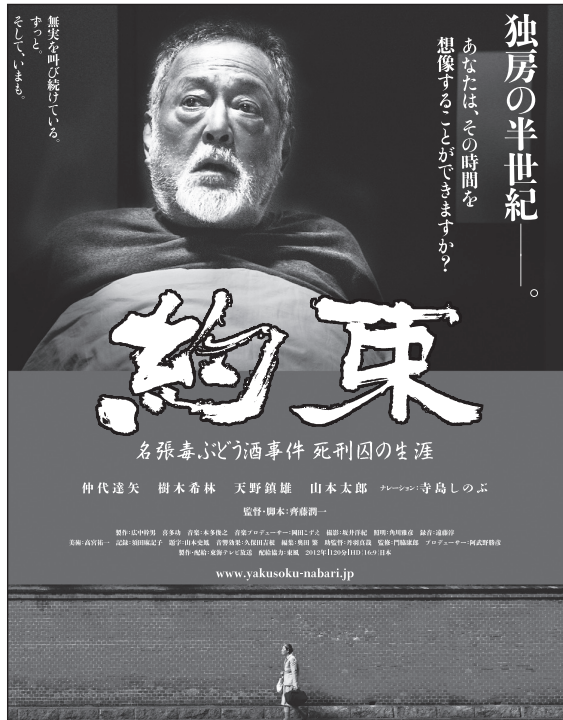
インフォメーション

死刑映画週間2

2月2～8日(1、2頁参照)

「約束 名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯」ロードショー公開

何度裏切られても、彼は信じ続ける。裁判所が事実と良



心に従って、無実を認めてくれると。

監督・脚本 齊藤潤一

出演 仲代達矢、樹木希林、天野鎮雄、山本太郎

ナレーション 寺島しのぶ

2月16日(土)～

会場 ユーロスペース

京都弁護士会 死刑を考える日

2月16日午後1時～4時

会場 京都キャンパスプラザ

参加費無料/申込不要

映画「死刑弁護人」上映

講演 講師: 安田好弘弁護士

詳細未定(京都弁護士会のHPでご確認下さい)

死刑制度について

——犯罪被害者と冤罪被害者の立場から(仮)

3月30日(土)午後2時～5時

講師・河野義行氏(著述家、松本サリン事件被害者)

浅野健一氏(同志社大学社会学部メディア学科教授)

犯罪被害と冤罪被害を同時に体験した河野義行氏とマスメディア問題に詳しい浅野健一氏の講演を通じ、死刑制度廃止の意識作りの機会を提供する。

会場 京都弁護士会館地下大ホール

入場無料

主催 京都から死刑制度廃止をめざす弁護士の会

★『死刑弁護人』自主上映会を主催していただける方を募集しております。

詳しくは映画配給会社・東風 03-5919-1542 までお問い合わせください。

ブックレビュー

『孤立する日本の死刑』デイビッド・T・ジョンソン、田鎖麻衣子著

東アジアでの死刑の状況が変わりつつある。死刑の抑制が進行し、死刑大国中国でさえ、執行方法の変化や死刑相当犯罪の減少などへ向かっている。ところが日本ではこの流れに逆行し、厳罰化は進み、死刑執行は増えている。本書は東アジア各国の死刑状況を紹介分析すると共に、日本の現状をさまざまな角度から検証する。

[現代人文社、2000円+税]

『僕たちの時代』青木理×久田将義

『実話ナックルズ』の編集長だった久田と、共同通信記者だった青木、裏と表のメディアで活動し、今フリーとなった二人が語るメディア状況論。「死刑論」として一章が割かれている。

[毎日新聞社、1600円+税]

『絞首刑』青木理著

木曾川・長良川事件の三人の元少年への死刑確定判決後、フォーラムで集会を持ったことがある。一審一人死刑

だったのが三人死刑確定となる少年法の理念を反故にする酷い判決だったからだ。著者は本書元本でこの事件に1章を割いており被告たちと交流が続いていた。確定判決直後、隠しカメラで元少年を撮影し写真週刊誌『FRIDAY』に掲載する。それに対する拘置所の対応は死刑制度の本質をいみじくも明らかにする。著者がなぜ敢えて撮影し発表したか、原書刊行後の取材を大幅に加筆した必読の決定版。

[講談社文庫、648円+税]

【編集後記】

2012年には死刑廃止チャンネルを立ち上げ、死刑映画週間を成功させた。また一昨年のフォーラム90の死刑確定者アンケートを『死刑囚90人 聞こえますか、獄中からの声』として刊行、日韓死刑廃止運動の架け橋として活動している朴秉植さんの本の刊行と出版記念集會も12年の大きな成果だった。

12月総選挙で民主党から自民党へ。民主党最後の1年は3度7人の死刑を執行したが、安倍政権下ではより激しい執行の嵐が予想される。私たちは谷垣法相の選挙区である京都府福知山市での地元行動を計画している。決まればホームページ、死刑廃止チャンネルでお知らせする。

昨年に引き続き、2月2日からユーロスペースで1週間、死刑映画週間を行う。「少年死刑囚」は東京では58年ぶりの公開だし、「ハヴンズストーリー」は光市事件に着想を得た大

長編映画、冤罪事件で1、2審死刑判決の出た八海事件を描いた「真昼の暗黒」のトークは布川事件で再審無罪となりいまま国賠を提訴した桜井昌司さんに出ていただく。最終日最終回の「死刑弁護人」上映後のトークは安田弁護士と齊藤監督に加えてナレーションの山本太郎さんにも加わっていただく。いろいろと力を込めた企画だ。ぜひすべての作品を見ていただきたい。

4月20日から6月23日まで、鞆の津ミュージアムで「アウトサイダー・アート 死刑囚の描く表現展」が予定されている。大道寺幸子基金のこれまでの応募作の大規模な展示会だ。詳しくは次号でお伝えする。

また今年の死刑廃止全国合宿は11月30日(土)12月1日(日)の2日間、広島市で行われることが決まった。今のうちから予定に入れておいていただければと思う。(F)

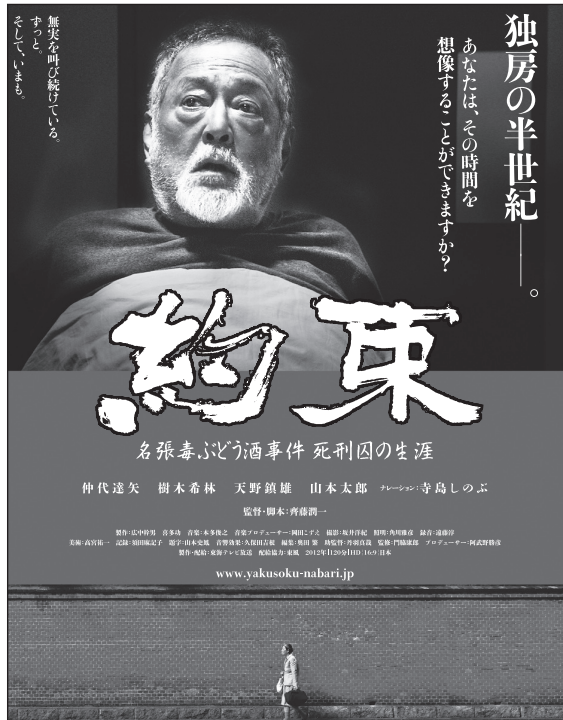
インフォメーション

死刑映画週間 2

2月2～8日(1、2頁参照)

「約束 名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯」ロードショー公開

何度裏切られても、彼は信じ続ける。裁判所が事実と良



心に従って、無実を認めてくれると。

監督・脚本 齊藤潤一

出演 仲代達矢、樹木希林、天野鎮雄、山本太郎

ナレーション 寺島しのぶ

2月16日(土)～

会場 ユーロスペース

京都弁護士会 死刑を考える日

2月16日午後1時～4時

会場 京都キャンパスプラザ

参加費無料/申込不要

映画「死刑弁護人」上映

講演 講師:安田好弘弁護士

詳細未定(京都弁護士会のHPでご確認下さい)

死刑制度について

——犯罪被害者と冤罪被害者の立場から(仮)

3月30日(土)午後2時～5時

講師・河野義行氏(著述家、松本サリン事件被害者)

浅野健一氏(同志社大学社会学部メディア学科教授)

犯罪被害と冤罪被害を同時に体験した河野義行氏とマスメディア問題に詳しい浅野健一氏の講演を通じ、死刑制度廃止の意識作りの機会を提供する。

会場 京都弁護士会館地下大ホール

入場無料

主催 京都から死刑制度廃止をめざす弁護士の会

★『死刑弁護人』自主上映会を主催していただける方を募集しております。

詳しくは映画配給会社・東風 03-5919-1542 までお問い合わせください。

ブックレビュー

『孤立する日本の死刑』デイビッド・T・ジョンソン、田鎖麻衣子著

東アジアでの死刑の状況が変わりつつある。死刑の抑制が進行し、死刑大国中国でさえ、執行方法の変化や死刑相当犯罪の減少などへ向かっている。ところが日本ではこの流れに逆行し、厳罰化は進み、死刑執行は増えている。本書は東アジア各国の死刑状況を紹介分析すると共に、日本の現状をさまざまな角度から検証する。

[現代人文社、2000円+税]

『僕たちの時代』青木理×久田将義

『実話ナックルズ』の編集長だった久田と、共同通信記者だった青木、裏と表のメディアで活動し、今フリーとなった二人が語るメディア状況論。「死刑論」として一章が割かれている。

[毎日新聞社、1600円+税]

『絞首刑』青木理著

木曾川・長良川事件の三人の元少年への死刑確定判決後、フォーラムで集会を持ったことがある。一審一人死刑

だったのが三人死刑確定となる少年法の理念を反故にする酷い判決だったからだ。著者は本書元本でこの事件に1章を割いており被告たちと交流が続いていた。確定判決直後、隠しカメラで元少年を撮影し写真週刊誌『FRIDAY』に掲載する。それに対する拘留所の対応は死刑制度の本質をいみじくも明らかにする。著者がなぜ敢えて撮影し発表したか、原書刊行後の取材を大幅に加筆した必読の決定版。

[講談社文庫、648円+税]

【編集後記】

2012年には死刑廃止チャンネルを立ち上げ、死刑映画週間を成功させた。また一昨年のフォーラム90の死刑確定者アンケートを『死刑囚90人 聞こえますか、獄中からの声』として刊行、日韓死刑廃止運動の架け橋として活動している朴秉植さんの本の刊行と出版記念集會も12年の大きな成果だった。

12月総選挙で民主党から自民党へ。民主党最後の1年は3度7人の死刑を執行したが、安倍政権下ではより激しい執行の嵐が予想される。私たちは谷垣法相の選挙区である京都府福知山市での地元行動を計画している。決まればホームページ、死刑廃止チャンネルでお知らせする。

昨年に引き続き、2月2日からユーロスペースで1週間、死刑映画週間を行う。「少年死刑囚」は東京では58年ぶりの公開だし、「ハヴンズストーリー」は光市事件に着想を得た大

長編映画、冤罪事件で1、2審死刑判決の出た八海事件を描いた「真昼の暗黒」のトークは布川事件で再審無罪となりいまま国賠を提訴した桜井昌司さんに出ていただく。最終日最終回の「死刑弁護人」上映後のトークは安田弁護士と齊藤監督に加えてナレーションの山本太郎さんにも加わっていただく。いろいろと力を込めた企画だ。ぜひすべての作品を見ていただきたい。

4月20日から6月23日まで、鞆の津ミュージアムで「アウトサイダー・アート 死刑囚の描く表現展」が予定されている。大道寺幸子基金のこれまでの応募作の大規模な展示会だ。詳しくは次号でお伝えする。

また今年の死刑廃止全国合宿は11月30日(土)12月1日(日)の2日間、広島市で行われることが決まった。今のうちから予定に入れておいていただければと思う。(F)